『東京大学言語学論集』34 (2013.9) 75-84

バスク語レクンベリ方言の再帰所有形

石塚 政行
noitartsinimda@gmail.com

キーワード：バスク語、レクンベリ方言、再帰表現、所有、主語、プロミネンス

要旨

バスク語レクンベリ方言の三人称所有代名詞 *bere*（再帰所有形）の先行詞に関する制限を記述する。東部・中部方言の再帰所有形の先行詞は同一文中になければならないことが知られているが、その一つであるレクンベリ方言でも文を越えた照応は許されない。それだけではなく、*bere* を含む句が主語かどうか、項か付加詞か、どのような節にあるか、焦点化されているかどうか、などによって照応可能な先行詞が制限される。レクンベリ方言に特徴的なこの制約を van Hoek (1997) の reference point モデルをもとに考察し、この方言では自動詞の主語／他動詞の動作主項であるということがプロミネンスを高めると結論する。

1. はじめに

代名詞 BERE（単数：*bere* "his/her/its"、複数：*beren* "their"）はバスク語唯一の三人称代名詞である。再帰代名詞が用いられる場合を除けば、バスク語では三人称名詞句の代用形に指示詞が使われる。特別な三人称代名詞の形式は BERE 以外には存在しない。また、BERE は一種の再帰表現である。東部および中部方言では、同じ文または節の中にある名詞句と同一指示の場合にのみ BERE が可能で、そうでない時には指示詞が使用される。本論文ではフランス、バス＝ナヴァールで話されている方言の一つを取り上げ、BERE の先行詞になれるのがどのような名詞句かを考察する。

Rebuschi (1989a) の定式化では、BERE の先行詞に関する条件は方言ごとに三つのタイプに分けられ、レクンベリ方言はそのうちの「同一文中に先行詞を持たなければならない」タイプである。また、バスク語の多くの方言では、BERE はどのような文法関係を持つ名詞句にも用いることができる (Rebuschi 1989b) が、レクンベリ方言では焦点以外の S/A には用いることができないという制約がある点で特異である。

以下では、BERE によって修飾されている名詞を含む最大の名詞句を「BERE 句」と呼称する。

2. BERE 句が焦点になっていない場合

動詞の直前が焦点位置であり、疑問詞やその他の焦点化されている名詞句はこの位置に来なければならない[1]。BERE 句の振る舞いは焦点になっているかどうかで異なるので、分けて考察する。動詞の後に BERE 句が来る文を用いて容認性判断を行い、BERE 句が焦点になっていないことを保証する。

[1] 逆は必ずしも成り立たない。

2.1 同節項

まず、BERE句と先行詞が同節項（co-argument）の関係にある場合を考察する。ある項が先行詞になっている時、BERE句は自動詞の主語や他動詞の動作主項に立てない。それ以外の場合はどのような同節項でもありうるようである。

BERE句は、(1)ではいわゆる非対格自動詞の与格項、(2)は具格項、(3)は属格項、(4)はいわゆる非能格自動詞の与格項、(5)は他動詞の目的語で、それぞれ主語や動作主項が先行詞になっている例である。

(1) *Manex urran-du da [bere emazti=a-ri]*
M. approach-PFV PRS.3SG BERE wife=SG-DAT
「マネシュ i は自分 i の妻に近付いた」

(2) *Manex ahaz-tu da [bere izen=a-z] ere*
M. forget-PFV be.PRS.3SG BERE name=SG-ISNT even
「マネシュ i は自分 i の名前も忘れてしまった」

(3) *Manex beha dago [bere adixkide bat-en]*
M. waiting be.PRS.3SG BERE friend one-GEN
「マネシュ i は自分 i の友人を待っている」

(4) *Manex telefona-tu du [bere aitam=e-r]*
M. telephone-PFV PRS.3SG>3SG BERE parent=PL-DAT
「マネシュ i は自分 i の両親に電話した」

(5) *Manex jo ditu [bere anai=ak]*
M. hit.PFV PRS.3SG>3PL BERE brother=PL
「マネシュ i は自分 i の兄弟を叩いた」

これらに対して、(6)と(7)はそれぞれ自動詞主語・他動詞動作主項がBERE句となっており、先行詞は同じ節の与格項や目的語である。これらの例は容認されない。

(6) **Manex-i urran-du da [bere emazti=a]*
M.-DAT approach-PFV PRS.3SG BERE wife=SG
（彼 i の妻はマネシュ i に近付いた）

(7) **Manex jo dute [bere anai=ak]*
M. hit.PFV PRS.3PL>3SG BERE brother=PL
（彼 i の兄弟はマネシュ i を殴った）

なお、(8, 9)のように主語以外のものが先行詞となることも可能である。(8)では与格項が先行詞、目的語がBERE句となっており、(9)はその反対である。

(8) *xakurr=a-ri erakutx-i dakot* [*bere nauxi=a*]
dog=SG-DAT show-PFV PRS.1SG>3SG.to.3SG BERE owner=SG
「私は犬 i に自分 i の飼い主を見せた」

(9) *Manex erakutx-i dakot* [*bere xakurr=a-ri*]
M. show-PFV PRS.1SG>3SG.to.3SG BERE dog=SG-DAT
「私はマネシュ i を彼 i の犬に見せた」

一つだけ例外的に絶対格項が先行詞となれる二項自動詞が見つかっている。それは *guztatu*「［絶対格］が［与格］に好ましい」という動詞である。*Guztatu* は BERE に関して、与格項が他の動詞の主語と同じ振る舞いをする。(10) のように与格項を先行詞として絶対格項（通常の二項自動詞の主語）を BERE 句とすることが可能であり、逆に絶対格項を先行詞として与格項を BERE 句とすることはできない。

(10) *Maji-ri biziki guzta-tzen zako* [*bere xenarr=a*]
M.-DAT very be.attractive-IPFV PRS.3SG.to.3SG BERE husband=SG
「マディ i は自分 i の夫がとても好きだ」

(11) **Maji biziki guzta-tzen zako* [*bere xenarr=a-ri*]
M. very be.attractive-IPFV PRS.3SG.to.3SG BERE husband=SG-DAT
（彼女 i の夫はマディ i がとても好きだ）

2.2 同じ節の項と付加詞

BERE 句と先行詞の一方が項で、もう一方が同じ節の付加詞である場合を考える。ここで二つの付加詞を区別しなければならない。Van Hoek は process-internal/external modifier を区別し、周辺的だが動詞に内在的な部分を描写する modifier（空間・時間的背景など）を process-internal、そうではないもの（概念的文脈など）を process-external としている (Van Hoek 1997: 82ff.)。

まず、process-internal modifier は BERE 句の先行詞になることができないが、その逆は可能である (12-15)。

(12) **behi=e-n erdi-an ikux-ten dut* [*beren nauxi=a*]
cow=PL-GEN among-INE see-IPFV PRS.1SG>3SG BERE owner=SG
（牛たち i の間にそれら i の飼い主が見える）

(13) *nauxi=a ikux-ten dut* [*bere behi=e-n*] *erdi-an*
owner=SG see-IPFV PRS.1SG>3SG BERE cow=PL-GEN among-INE
「飼い主 i が彼 i の牛たちの間に見える」

(14) **behi bat xerka-tzen dute Manex eta Maji-kilan* [*beren haurr=ak*]
cow one search.for-IPFV PRS.3PL>3SG M. and M.-COM BERE child=PL
（［マネシュとマディ］i と一緒に彼ら i の子どもは牛を探している）

(15) *behi bat xerka-tzen dute Manex eta Maji [bere haurr=e-kilan]*
cow one search.for-IPFV PRS.3PL>3SG M. and M. BERE child=PL-COM
「［マネシュとマディ］ i は彼ら i の子どもと一緒に牛を探している」

ところが、process-external modifier は BERE 句の先行詞になることができる (16-17)。

(16) *Manex xald=a jan du [bere haurr=a-ren] uxte-z*
M. soup=SG eat.PFV PRS.3SG>3SG BERE child=SG-GEN thought-INST
「彼 i の子どもの考えではマネシュ i はスープを飲んだ」

(17) *Manex-en uxte-z xald=a jan du [bere haurr=a]*
M.-GEN thought-INST soup=SG eat.PFV PRS.3SG>3SG BERE child=SG
「マネシュ i の考えでは彼 i の子どもはスープを飲んだ」

2.3 主節の項と名詞節の名詞句

主節の項が先行詞の場合、BERE 句は名詞節中のどのような名詞句にもなれる。(18) は与格項、(19) は主語、(20) は付加詞の例である。(18) では先行詞は主節の与格項、他は主節の主語になっている。

(18) *Manex-i galdegin dakot*
M. ask.PFV PRS.1SG>3SG.to.3SG

ea erremedü=a eman duzu-n-ez [bere behi=a-ri]
whether medicine=SG give.PFV PRS.2SG>3SG-COMP-INST BERE cow=SG-DAT
「あなたが彼 i の牛に薬を与えたかどうか私はマネシュ i に尋ねた」

(19) *Manex egundaino et=zuen uxte izan*
M. never not=PST.3SG>3SG thought have.PFV

hori egin-en zu-ela [bere haurr=a]
that do-FUT PST.3SG>3SG-COMP BERE child=SG
「マネシュ i は彼 i の子どもがそれをするとは思ってもみなかった」

(20) *Manex nahi du Donapaleu-rat joan nadin [bere haurr=a-rekilan]*
M. want have.PRS.3SG>3SG Saint.Palais-ALL go SBJV.PRS.1SG BERE child=SG-COM
「マネシュ i は私に彼 i の子どもとサン＝パレへ行ってもらいたがっている」

一方、名詞節中の名詞句を先行詞として主文で BERE 句を用いることはできない (21-23)。

(21) *[*bere nauxi=a-ri*] *galdegin dakot*
BERE owner=SG-DAT ask.PFV PRS.1SG>3SG.to.3SG

ea erremedü=a eman duzu-n-ez behi hau
whether medicine=SG give.PFV PRS.2SG>3SG-COMP-INST cow this
（あなたがこの牛 i に薬をあげたかどうか私はその i 飼い主に尋ねた）

(22) *[*bere ait=a*] *egundaino et=zuen uxte izan*
BERE father=SG never not=PST.3SG>3SG thought have.PFV

hori egin-en zu-ela Peio
that do-FUT PST.3SG>3SG-COMP P.
(彼 i の父はペイヨ i がそれをするとは思ってもみなかった)

(23) * [*bere ait=a*] *nahi du* *Donapaleu-rat joan nadin* *Peio-kilan*
BERE father=SG want have.PRS.3SG>3SG Saint.Palais-ALL go SBJV.PRS.1SG P.-COM
(彼 i の父は私にペイヨ i とサン＝パレへ行ってもらいたがっている)

2.4 副詞節中の名詞句と主文の項

副詞節の場合は、前置された副詞節中の項を先行詞として主節で BERE 句を用いることができる (24)。逆に、主節の項を先行詞として副詞節中に BERE 句を使うこともできる (25)。

(24) *Peio itzul-i de-larik* [*bere aitam=ak*] *eztabaita egi-ten zuten*
P. return-PFV PRS.3SG-CNS BERE parent=PL dispute do-IPFV PST.3PL>3SG
「ペイヨ i が戻ったとき彼 i の両親は口論していた」

(25) [*beren xemi=a*] *itzul-i de-larik* *Manex eta Maji eztabaita egi-ten zuten*
BERE son=PL return-PFV PRS.3SG-CNS M. and M. dispute do-IPFV PST.3PL>3SG
「彼ら i の息子が戻ったとき［マネシュとマディ］i は口論していた」

同じような状況でも、接続詞 *eta* を使って等位接続構造にすると、BERE は文を越えて照応することができない。

(26) **Peio itzul-i da eta barni-an eztabaita egi-ten zuten* [*bere aitam=ak*]
P. return-PFV PRS.3SG and inside-INE dispute do-IPFV PST.3PL>3SG BERE parent=PL
(ペイヨ i が帰宅すると中では彼 i の両親が口論していた)

2.5 まとめ

節の範囲では主語が BERE 句であることは容認されない。また、process-internal modifier を先行詞とする BERE 句は認められない。

複文になると、名詞節と副詞節で振る舞いが異なる。名詞節中の名詞句は、主節の項を先行詞とする BERE 句になることができる。逆に主節の BERE 句は名詞節中の項を先行詞とすることはできない。一方、前置された副詞節中の項なら先行詞として主節で BERE 句を使うこともできる。等位接続構造は BERE の照応をブロックする。

3. BERE 句が焦点になっている場合

上述したように、節の範囲では主語が BERE 句であることは容認されない。しかし BERE 句が焦点になるとこの制限は無くなる。

(27) *Manex-i,* [*bere emazti=a*] *urran-du da*
M.-DAT BERE wife=SG approach-PFV PRS.3SG
「マネシュ i には彼 i の妻が近付いた」

(28) *Manex,* [*bere anai=ak*] *jo dute*
M. BERE brother=PL hit.PFV PRS.3PL>3SG
「マネシュ i は彼 i の兄弟が殴った」

これらの文では BERE の先行詞が前提に含まれており、このことが上述の制限が回避される要因になっている可能性もある。しかし次の (29) から分かるように、たとえ先行詞が前提に含まれていても BERE を含む項が焦点位置に無ければ、上述の制限がかかる。(29) は *bere* が無ければまったく問題の無い文と判断される。このことから、(27) と (28) の例を可能にしているのは、BERE を含む名詞句の焦点化であると考えられる。

(29) **Manex atzo eax-i dute bere aitam=ak eta Maji gaur*
M. yesterday scold-PFV PRS.3PL>3SG BERE paretn=PL and M. today
（マネシュは両親に昨日叱られ、マディは今日叱られた）

4. 考察

以下では上述した BERE と先行詞の振る舞いを van Hoek (1997) の議論に基づいて考察する。

4.1 参照点モデル

Langacker (1991) が所有表現の分析に用いた参照点 (reference point) の考え方をもとにして、van Hoek (1997) は英語の照応現象を以下のようにまとめている (ibid. 57)。

- ある nominal を参照点とするドミニオン中に、それと同一指示の full nominal は出現できない
- 代名詞の先行詞は、その代名詞を含むドミニオンの参照点となることができるくらいの際立ちを持っていなければならない

Van Hoek は参照点を決める要因としてプロミネンス、語順、概念的結びつき (conceptual connectivity) を挙げている (ibid. 58ff.)。プロミネンスの高い方、先行する要素は参照点になりやすく、概念的つながりはそのドミニオンの決定に関わる。

4.2 再帰的性質

レクンベリ方言の BERE は、基本的に文中に無い要素を先行詞とすることができないという弱い再帰的性質を持っている。Van Hoek は再帰代名詞の意味的特徴を次のように記述している (ibid. 174)。

- 再帰形とその先行詞は同じ動詞の項となる。すなわち、同じ関係を精緻化しているので概念上強く結びついている。
- 先行詞は節中でもっともプロミネントな参照点になっている
- 再帰形の指示対象を動作主は semisubjective に捉えている

BEREを含む主語は、焦点化された時にだけ許される。次に見るように節中では主語が最も参照点になりやすい要素であるので、これは一見不思議な現象である。しかし、ある要素を焦点とする文は、前提を必ず持つ。たとえば、《リンゴを食べたのはマネシュだ》という文が出て来るには、《誰かがリンゴを食べた》ということが了解されているはずである。この前提中の要素が先行詞／参照点として振る舞っていると考えることができる。再帰的性質は、先行文脈と後続する文が同じ述語を持ち、同じ関係をプロファイルしていることによって、概念上の結びつきが強くなるからである。

4.3 プロミネンスの違い

BEREを含む主語(S/A)は同じ節の中の目的語や与格項を先行詞とすることはできないが、その逆は可能である。これは、トラジェクターがランドマークよりもプロミネントであり、参照点になりやすい、ということによって説明できる(ibid. 65f.)。
なおguztatu「好ましい」は再帰代名詞*bere buria*についても一貫して与格項が主語のように振る舞う(30, 31)。経験者が与格で、対象が絶対格となるので、例外的に与格名詞句がトラジェクターとなっていると考えられる。

(30) a. *Maji-ri biziki guzta-tzen zako bere_buria*
M.-DAT very be.attractive-IPFV PRS.3SG.to.3SG herself

b. **Maji biziki guzta-tzen zako bere_buria-ri*
M. herself-DAT

「マディ i は自分 i がとても好きだ」

(31) a. *Maji-k bere_buria ikux-ten du mirraira-n*
M.-ERG herself see-IPFV PRS.3SG.to.3SG mirror-INE

b. **Maji bere_buria-k ikux-ten du mirraira-n*
M. herself-ERG

「マディ i は自分 i を鏡で見ている」

また、BEREを含むcomplement（項）は、その節のmodifierの中の名詞句を先行詞とすることができない。これはmodifierの中の名詞句はプロファイルされていないため、プロミネンスが低いからである。

本来プロミネンスの高い自動詞主語や他動詞動作主項のBERE句が、焦点化された場合には同じ節の名詞句を先行詞とすることができるのは、先行詞となる名詞句が前提となって参照点になりやすくなっている一方、焦点であるBERE句の方は参照点とし得ないためであると考えられる。

4.4 Internal/External Modifier

Process-internal modifierはexternalなものよりもcomplementに近いため、概念的結びつきが強いが、逆にexternal-modifierは概念的結びつきが弱いため、前置することで主語のドミニオンに含まないことができる。

(32) a. *In Kathleen Turner's latest movie, she falls in love with Tom Cruise.*
b. **She falls in love with Tom Cruise in Kathleen Turner's latest movie*

(ibid. 85ff.)

(33) のように、external-modifier を後置すると容認性が下がるのは、主語のドミニオンに含まれてしまうからだと言える (cf. 17)。

(33) ?[*bere haurr=a*] *xald=a jan du Manex-en uxte-z*
BERE child=SG soup=SG eat.PFV PRS.3SG>3SG M.-GEN thought-INST
「マネシュ i の考えでは彼 i の子どもはスープを飲んだ」

4.5 問題点

BEREは名詞句中でプロファイルされていない要素である。そのため、BERE自体はその他の項よりもプロミネンスが低く、節全体の参照点となる必要はない。Van Hoek はこのような位置に現れる代名詞が項と同一指示になることは不可能ではないとしている (cf [34], ibid. 69ff.)。

(34) *His mother loves John.*

ただし、(34) は典型的な後方照応 (35) に比べてプロミネンスの差がはっきりしていないので、文脈が無いと容認されなかったり、話者によって判断が異なるのだと説明している。

(35) *In his Prairie Home Companion radio series, Garrison Keillor brought a remote part of Minnesota to life.*

(ibid. 112)

さらに彼女はコーパスから例 (36) を引用し、(34) における his mother よりも細かい修飾部が代名詞を背景化し、結果としてプロミネンスの差が大きくなるために容認されるのではないかと述べている (ibid. 122)。

(36) *Their dome-shaped heads and smaller ears set Asiatic apart from African elephants.*

このような例を見ると、レクンベリ方言のBEREが主語中で使えないという観察の妥当性が疑わしくなるかもしれない。BEREの使用を妨げている要因は主語中であるということではなく、先行詞とのプロミネンスの差が充分でないことにあるかもしれないからである。しかし、例 (37) のように主語を関係節で修飾してもBEREの先行詞に関する容認性は変わらないようである。

(37) *[*Donibanegarazi-ko opital-an lan egi-ten du-en*]
Saint.Jean.Pied.de.Port-ADN hospital-INE work do-IPFV PRS.3SG>3SG-REL

bere ikuxi=a telefona-tu du Manex-i
BERE cousin=SG telephone-PFV PRS.3SG>3SG M.-DAT
（サン＝ジャン＝ピエ＝ド＝ポルの病院で働いている彼 i のいとこがマネシュ i に電話をかけて来た）

つまり、レクンベリ方言でも、自動詞の主語や他動詞の動作主項であるということ自体に、プロミネンスを上げる要因があるということが結論できる。

4.6 まとめ

レクンベリ方言における名詞句のプロミネンスの差は (38) のようにまとめられる。

(1) a. 自動詞主語・他動詞動作主項 > その他の項 > Modifier

b. 主節中の名詞句 > 従属節中の名詞句

(38) に照らしてプロミネンスが BERE 句と同じかそれよりも高い名詞句は BERE 句の先行詞となることができる。また、Process-external modifier と副詞節中の名詞句は BERE 句よりも前に置くことで BERE 句の先行詞とすることができる。

略号

1：一人称、2：二人称、3：三人称、ADN：連体、ALL：向格、COM：共格、ERG：能格、FUT：未来（前望）分詞、GEN：属格、INE：内格、INST：具格、IPFV：未完了分詞、PL：複数、PFV：完了分詞、PL：複数、PROL：通格、PRS：直説法現在、PST：直説法過去、SBJV：接続法、SG：単数、

参考文献

Langacker, Ronald W (1991) *Foundations of cognitive grammar.* Vol. 2: *Descriptive application.* Stanford: Stanford University Press.

Rebuschi, Georges (1989a) L'opposition entre les génitifs réfléchis et non-réfléchis du basque, et la variation dialectale. *Fontes Lingvae Vasconvm* 21: 161-181.

—— (1989b) Is there a VP in Basque? In: László Marácz & Pieter Muysken (eds.) *Configurationality: the typology of asymmetries*. Dordrecht: Foris, 85-116.

Van Hoek, Karen (1997) *Anaphora and conceptual structure*. Chicago: University of Chicago Press.

Reflexive Possessive in the Lecumberry Dialect of Basque

ISHIZUKA Masayuki
noitartsinimda@gmail.com

Keywords: Basque, Lecumberry dialect, reflexive, possessive, subject, prominence

Abstract

I describe what can and cannot be the antecedent of the reflexive possessive pronoun *bere* in the Lecumberry dialect of Basque. It has been pointed out that the pronoun must be coreferential with the antecedent at least in the same sentence, in the Eastern and Central dialects, one of which is the dialect described here. I refine the constraints on the anaphora of *bere,* in terms of subjecthood, argumenthood, clause type, and focus. It is argued that the constraint particular to the dialect indicates that S-arguments of intransitive verbs and A-arguments of transitive verbs are more prominent in nature than the other arguments, on the basis of the reference point model developed by van Hoek (1997).

（いしづか・まさゆき）